

# 丸木舟速報隊

ながたかずひさ

## ■ 目次

「街道へゆこう！秋田編 なまはげ・マイラヴ」

「プリキュアになりたくて。」

「Diplomacy」

「丸木舟速報隊」

街道へゆこう！秋田編  
なまはげ・マイラヴ

「……遼太郎。」

「……そっち、行っている？」

「イヤ」

流花は唇を尖らせると、掘りごたつからその長い脚を抜いた。機嫌を損ねて部屋に戻るのかと思いきや、

「……えい」

「……だーかーらー」

僕の横に潜り込む。

あのな。

みどりそこに居るんです隣の部屋に。

「だいじょぶだいじょぶ。声あげないから」

「声あげるようなこと企まないで」

「だから遼太郎も、がまんするんだよ？」

「流花……酔ってる？」

「酔ってないもーん」

両手を上げてしなだれかかる。

べろーんと仰向けで、僕の両膝を枕にする。

「にゅふふふふ」

「もー……こんなところで寝たら風邪ひくよ？　ほら、起きて起きて」

「らいじょーぶー。おふとん、あるから。」

「……えい」

流花は僕の左手を取って、胸のあたりに被せた。薄いセーターの下から、豊かで柔らかい感触が……つて。

「流花……下着、つけようよ」

「らっていいお風呂らったんらもーん。もう締め付けるの、イヤ」

「相変わらず束縛が嫌いだねえ」

「下もはいてないよ」

「ぶっ」

「確かめりゅ？」

「どこにそんな必要が」

まあ、こいつのこつたから本当だろう。恥ずかしくて顔が痛い。なんでこつちが恥ずかしがらにやなんのだ。

「はー……遼太郎枕に遼太郎布団。ちあわちえ」

ぽにゅ・ぽにゅ。

布団を掛け直すように、僕の腕をその胸に何度も押し付ける流花。  
やーらかくて弾力があつて、しかしその中にわずかに硬……いや！

「るーかー。もう寝よ？　ね？」

「りよーたろーといっしょならー」

「いやーん」

「じゃなきゃまだ呑むー」

ばたばたとコタツの上を彷徨う流花の右手。

つたく、弱いくせに好きなんだから。

このままではどうせ零したりしてぐしょぐしょになりそうなので、猪口を取ってやった。  
が、それを両手で捧げるように持ったまま、口をつけない。

「……によめない」

「身体を起こしなされ」

「によませて」

「どやって。病人用の吸い飲みなどここにはない！」

流花は悪魔のような笑みをして、唇を半開きにして小さく舌を出した。  
バカもの。

ノーの意思表示を、首を振ることで表す。

と、唇を尖らせて、眼を閉じる。

アホもの。

しかし眼を閉じられていたので拒否の意を表すことができない。さすれば……  
僕は猪口に入った銘酒「飛良泉」に小指をつけて、流花の唇に、

ちよん。

……ぱく。

ちゅーーー……

アホは僕ですね。

流花は目を開けて、悪魔と天使が結婚したような顔をした。  
「たたくもーいつもこうなら可愛……いや!!」

「離しなさい」

「らめ。もつろちよーらい」

「うー」

あなたの噛んだ小指が板井（廃業）  
どうすべかな……



あ。

そうだ、身体全体を使うんだ、遼太郎！

「……よっ」

「きや」

膝を立てた。自然、流花の上半身も起きる。

「もー……風情のない」

「風情かこれ!？」

「いいから吞ませろ、ぱか」

ぱかとまで言われては従う他はない。

猪口を口元へ持つてつてやる。

こく、こく、こく。

三口で盃を干すと、身体を捻って僕の方に向き直る。にへら、と笑って、唇を突き出し

た。

それは……

「いやっ！」

「んんん」

「だめっ」

「んんんんんんん」

「ゆるして!？」

「んんんんんんんんんん」

僕の名前は千葉遼太郎。新聞記者です。

きょうは秋田へやってきました。

雪の東北はしばれる寒さも骨身に伝えますが、外が怖いほど静かですね。

今回は「街道へゆこう！」の取材旅行です。僕が特集記事を書き、この逢沢流花はツアコン兼運転手兼編集者。

いま隣室で寝てる須磨克美画伯が挿絵を描き、僕と同僚にして妻、みどりが、写真と食

いしん坊の担当。

いや、これは冗談じゃなくて、グルメ関係は記事の中でも特に人気が高かったのですっかり取材する必要があるのですが、TV番組などでもお馴染みのように、限られた時間でたくさん料理をいただくのは大変なんです。大食ほど、この取材に必要な能力はありません。

宿の掘りごたつの上には、みどりと画伯が食べ散らかした秋田名物、きりたんぽに各種いぶりがっこにハタハタに稲庭うどん……の残骸。そして林立する銘酒の一升瓶、「出羽鶴」「太平山」「爛漫」「高清水」……の空瓶。

画伯は食もすごいんですが、奇人変人たくさん見てる新聞記者の僕ですら初見の、まさしくウワバミで、水よりもスムーズにお酒を流しこみます。あの大きな胸とおしりにはお酒が入って月の砂漠を横切るのか、と不安がよぎるほどです。

で、みどりがそれに挑んで見事轟沈、二人して隣室に引っ込んで今頃泥のように。

その隙を泥棒猫に狙われてる最中です、はい。

いやまあ高校時代、彼女とはちよいといろいろありましたね……

んごきゅ、と喉を鳴らして、拗ね顔。

「……ケチ」

「けちな……」

「いっつもそう。あたしが恥を偲んで、恥を偲んで！思い切って擦り寄ってたら、いっつもそうやってあしらうだけ」

「そりゃ流花のタイミングが悪いんだよ。僕が撫でようとすると、いつもぷいつとどつか行っちゃうくせに」

「それは遼太郎のタイミングが悪いの」

流花はまったく猫そのもので、自分が寂しくなるとこれこのように、文字通り足元に身体中を擦りつけて喉を鳴らすくせに、興が乗らないときはこちらがどんなに猫なで声を出し低姿勢でもそそくさと塀の向こうに消えてしまう。

僕からすれば少しは僕の都合や気持ちも考えてくれ、と思ったし、彼女に言わせればそんなこと考えるあたしはあたしじゃない、と。

まあ、よくある話です。

「……あーあ、あたしもダンナサン、欲しいな」

「お。いい男紹介するよ。社に余りまくってんだいい男。よりどりみどりつかみどり。ど

「なんがいい？」

「遼太郎みたいなの」

「いやあそれはオススメしないね。あいつ見た目よりいいかげんだから苦勞するよ」

「苦勞、したいな」

「昔しただろ」

「また」

「僕は、あんまり」

「どんなになれば、いいの？」

「いやもう、そのまま。流花はそのまま」

「じゃあ、ちゅー迫ってもいいの？　ちゅー」

「いや、今じゃなくて。僕じゃなくて」

「……ちゅまんない」

「ぱったり、また僕を枕と布団にする。」

「だーかーらー。」

でもすぐ、ぱたぱたさせていた脚が止まる。

「……遼」

「ん？」

声が、さつきまでと違った。

むかし、たまに聞いた、声。この声聞いたことあるのは僕だけだろう、とかしよーもない優越感を刺激するのが巧いのもまさに、腹を上に向けて撫でられる、猫。

「……5時間だけ。5時間だけ、昔に戻ろ？」

「長っ」

「5分」

「だから」

「5秒」

「……ま、そのぐらいなら」

その大きな、潤んだ猫目で僕をまつすぐに見て、ゆっくり閉じた。僕はその瞳に、覆いかぶさる。

清酒の甘い匂いと、流花の甘い匂いが折り重なって、きもちよく鼻をくすぐる。  
やわらかいところどうしが、ふれるか、ふれないか、ふれ

「悪い子はいねがーーーーーッ!!

……。

……いだーーーーーッ!!」

ああみどり悪いやいいところへ。おねがい僕の貞操を守って？ あれ画伯までなんで  
すかそのカッコ。

二人して鬼のお面におもちやの金棒を持っている。  
お昼、男鹿の「なまはげ館」で手に入れたものだ。

「じょーだろーーーーー」

お前も涙流して悔しがる前に状況改善の手伝いをしろ。まったくコイツはいつもタイミン  
グが悪い。

おっとりものの画伯が、鬼の面の下からのんびり言った。あの、画伯、そのスケスケの薄寝間着でそのお面と金棒だと、なんのプレイかわかりません。

「みどりさんは大食い、遼太郎さんは面食い。」

アーティストの笑いは高度過ぎてついていけない。

「おさかなはくわえられてないから大丈夫！」

「によろしくだろ……」がえつてぎで……」

「あ、明日はどこへ行くんだっけ？ 秋田美人狩りいや探し？」



「りょーたろーろーろーっ!!」

みどりに金棒でぺこぽこ殴られ、流花にすがりつかれ、画伯にころころ笑われながら、先が思いやられた。

「街道へゆこう!」は、四十七都道府県全て巡る予定です。

プリキュアになりたいくて。

——いつもどおり脚本のアイデアに煮詰まっていますと、前に勤めてた会社のカリスマ広報からいきなり電話がありまして。

「ナガタくんさあ、プリキュアになってみない？」

「は？」

今年の夏は史上最凶と言われる暑さだったので、とうとうこの人にも来たのかと。

「……あれって、なれるもんなんスか？」

「いやさあそれがさあ、今度『中高年向け』のプリキュアやるらしくてさあ」

「はあ。」

それ『中高生向け』の間違いじゃないでしょうね？」

「違う違う。中高年。それで内々密に募集してるのよ候補者を。んで、ウチとこにも来たってわけ」

「はあ。」

いやちよつと待って下さいよ『アラレちゃん』であかねちゃんのお父さんが『三八は中年じゃない！』って言ってましたよ。ぼく中年じゃないです」

「『Dr.スランプ』ジャンプ本誌で読んでりや中年だよ」

「あかねちゃんのお父さんお名前なんて言いましたっけね」

「木緑紺。」

そんなことはどうでもいいんだよ」

場末の零細ゲーム会社にまで話が来てるってことは内々でもなんでもないような気もしたんですが、ま、その会社はアニメ業界との繋がりもありますから、その関連なのかな、と。

「どお？ オーディション、受けてみない？」

「おーでいしょん？ オーディションやってるんですかあれ」

「あたりまえじゃん！ みんななりたいもん、プリキュア」

「はあ。いや……はあ、まあ、そうですね、なりたいですね、プリキュア」

「でしょ？ どうよ、受けてくれる？」

「いや……受けるのやぶさかじゃないんですが、そのー社内に居るでしょハンサムさんが。キムラさんとか、タケミさんとか」

「みんな忙しいの」

「いや僕だつて忙しいですよ」

「みんな観るのはいいんだけど、自分がやるとなるとねえ。モチベーションが湧かなくて」

「いや僕だつてそんなん無いです」

「人気者になれるよお？」

「そういうエイジさんどうですか」

「オレ？ オレパチンコ行かなきゃいけないから」

「そりゃプリキュアには不向きだ」

「だろ？ タバコも吸えなくなるんだつて」

「本番ぐらい我慢なさいな」

「いや一年間禁煙しないと駄目なんだつて。最近ほらツイッターとかでポロツと言っちゃうじゃん、『値上げするから買いだめなう』とか。あれでクビだよクビ。降板だよ」

「そりゃプリキュアがタバコは吸え……えっちよつと待つて、中高年向けなら吸ったほうがいいんじゃないですかむしろ」

「そのへんは知らないよ東映に聞いて！」

なんで僕は突然の電話で逆ギレされてるのかわかんないのですがとにかくにも後ほど

メールするからつてもんで電話は切れた。

翌日に来た「社外秘！」とタイトルについてるメールを開けるとそれには（メールの文言を信じるなら）ちゃんと東映からのメールの転送である。

しかしここで驚愕の事実が判明、なんとオーディションには五人で来いつまり、一年間戦うチームセットまとめて採用するという。

あわかった、エイジさん五人集めるのめんどくさかったんだな？

ともあれ売られた喧嘩は買う・振られた仕事はする、がフリーの基本、まずは心の種を使つて仲間達を集めなきゃ。

そうね、心の大樹の夢を観た人を探すの。街中の美少年美少女の中から。

えっ、中高年向けって対象はいくつで我々はいくつで？

メールを詳しく読むと「そのへんは走りながら」と書いてある。老舗らしいおおらかさ

だ。もつとガチガチに戦略的なんかなと思ってました。

んで、その日の夜たまたま高校の卒業二〇周年同窓会の幹事お疲れ様会があつたんです。谷六の韓国居酒屋で。

「……えー、というわけ、で、えー、みんな！

プリキュアになつてみーひんか」

「「プリキュア!?!」」

集まつたのは紳士服製造販売のベッチ、乳酸菌飲料販売会社のオノリン、地銀に勤めるモリモリ、神戸で勤務医をやつてるツヂゴロ、そしてマーケティング会社勤務のコキワ。みんな華やかな心の花を持つ美少年です。三八歳から三九歳の男盛り花盛り。

「「……」」

しかし開口一番の後、沈黙とモツの唐揚げがテーブルを支配するわけです。しもたなあ、と。

「またナガタは今でもそんな子供向けアニメを見とんのか」とでもね、思われたんじゃないかと。

「……ナガタ、お前はいつも先走りすぎんねん」

「は」

「せやな。そのさ、一七、一八やったら若さで許されるけど、もうお前三八や。普通の会社やったら係長課長、出世するやつなら次長とかなってるかもしれん。そらあかで」

「はあ。」

えー……なにか悪いこと言いましたか」

「ここお前、お前入れて六人おるやんけ。プリキュア五人やろ？ 誰を落とすねん誰を」

「あー……」

えつ、ちよつと待って、全員希望やの!？」

「「あたりまえやないか」」

みんな真顔です。

「お前何言うてんねん、プリキュアになれる言うたら親が危篤でもバッテリーボックスに立



つわ!!」

「プリキュアやで!? わかってるか!? いまウチの息子かてライダーやウルトラマンになんたいなんて言わへんで。みんなプリキュアや!!」

「はあ」

そないに人気があつたとは……

「まあまあ、ナガタも別に悪気があつたわけやないし、そもそも社長二人もおつて全員やつてくれるとはフツー思わんやんけ」

ツズゴーが助け舟を出してくれました。さすが専門がリウマチ、普段から頑固なおじいちゃんお婆あちゃんの相手をしてるだけのことはある。

「会社なんかどうでもえええ!」

「プリキュアの方が大事や!」

「いやそういうわけにはいかんやろ」

「トップが一年ぐらい居なくてもちゃんと成立する会社に育てたつもりや」

「ウチはお父ちゃんに言うてちよつと調節してもらうわ」

ちなみにベツチとオノリンは経営者です。

「……いやまあそら自分の会社やったら逆に無理が効くか……いやそやけどモリモリ、あんたは無理やろ？ 銀行マンは」

「アホなに言うてんねん。銀行みたいな商売『ちよつと外回り行つてきます』言うたらたいていOKや」

「いや待つて待つて、そんなラブコメのデートのダブルブッキングみたいなことできんのかいな」

「できる。いやする。」

アホおまえオレ今でもラグビーやってんねんぞ。足腰は任せとけ。下半身は。ゲヘヘ」

「下ネタはたぶんダメ」

「うそくん、オレから下ネタとつたらなに残んのくん」

普段お堅い人ほど仕事はけるとハツチャケると言いますね。教師警官医者宴会は飲食店みんな嫌がります。

「コキワはあかんやろ、マーケティング会社やもんな、スポンサーもついてるようなTV番組で主役を張るなんて」

「そんなもん・いつ・さい・関係ない。」

ウチの姫ちゃんに『パパはプリキュアやねんで』って言えるなんてこんなチャンス逃してたまるか！ アホ！」

もちろん「姫ちゃん」というのは娘のことです。親Bですね。

あちなみにアホアホ言うのは関西の男の子の口癖ですのでスルーしてください。ジーコ元監督の「アシユケー」みたいなもんです。

「えっ、ちよつと待って、『オレ、プリキュアやねん』って周りに言うてええの？」

「あ！ そやそや正義のヒーローは秘密が基本やぞ、はいコキワだめー」

「えっ、えっ、うそ、あれは舞台の上の話やんな！ オレがプリキュア役をやってる、つてことは言うてええねやんな！」

「……ちよつと待って、それは東映のメールには書いてない」

「マジでー!?」

「いやそもそも不確定事項をペラペラ漏らしてる時点でビジネスマン失格やろ。はいコキワだめー」

「いやいや、まだ決まってるじゃないやんか!」

「そもそもそんな甘ったるい考え方でプリキュアになれるか! ええか続々襲ってくるシヨッカーみたいなんと毎週戦わなあかんねんぞ!」

みんな昭和四六年か四七年生まれなので、例えば古いんです、すいません。

「そうかー……ナガタすまん。もう黙っとく。もう黙っとくからプリキュアにして」

「いや僕に謝られても困るって。」

いやホンマみんなすまん、みんな忙しいやろからそんな全員OKやとは思ってもみなくて、みんなから人づてに適当な人紹介してもらおかな、と思つててついついっかり」

「……わかった!」

「どないしたんやツデゴ」

「……いやわかった。残念やけど、ホンマ残念やけど俺が涙を呑も!」

「「なんやて!?!」」

どうでもいい話ですが「ち」に点々なのは関西でお馴染み「つぢ肛門科」へのオマージュです。男の子はいくつになっても、「うんこちゃん」で笑顔一〇〇%です。二〇歳超えると「おっぱい」でも一〇〇%。

「……俺も今の話パツと聞いた時、

『このまま医者をやって一人一人の命を救うより、プリキュアになって地球を救う方がより世のため人のためになるんちゃうか』

思った。せやけどみんなの熱意の前には……そんな俺の都合で、そんな甘いことを思てるようではあかんと思った」

「「ツヂゴー……」」

「せや。

俺は医者や。プリキュアになれんでも、嫌々やってても人のためになる職業や！

プリキュアになったお前らには、負けへんで!!」

「「ツヂゴー!!」」

熱い。

昔からクールなようできて熱い男だ。まさに医師になるために生まれてきたような男。

「……そうと決まったら今は亡きツヂゴウの遺志を継いで」

「死んでないっちゅーねん」

「すまんすまん。」

いよいよプリキュア・セイコー発足なわけではありますが」

「「ええゝゝつ!! その名前は無いわゝゝ!!」」

私たちの出身校、セイコー学院言いましたね。カトリック系の規律厳しい中高一貫校でして、神父さん方に「地の塩たれ」と懇々と諭されてこの有様です。

「なんで! おまえら母校愛が無いんか母校愛が!」

モリモリは母校愛が強いんです。さすが個室ビデオ店が火事になったニュースが流れると安否確認のメールが殺到するナイス・ガイ。

それだけみんなに心配されてるってことで、羨ましい限りです。

「もつとカッコイイのにしようやあ。

たとえばプリキュア……コチュジャン」

「テールの上見たままやんけ」

「じゃ巨人はどう？」

「プリキュア・ジャイアンツ」

「おまえただ巨人ファンなだけやろ。ええか今年の落合はひと味違うで？」

「ちよつ、ちよつと待って、そこところはたぶん東映さんが決めるんちゃうかな、シリーズの流れもあるし」

「せやけどこっちから案を二三持つていくのは悪いことやないで。意気込みも感じられるし」

「おつ、さすがマーケッター」

「オレが思うにキャッチーでシズル感のあるボリユーミーなイメージを balan-shi にアソートしたコンピレーション的なユニークネスが必要なんや」

代理店の人ですなえ。

「だから具体案出してよ。コンセプトはええから」

「アサップでやらせていただきますがお見積りに三週間ばかりいただきます。ウチの内部のクリエイティブとツテのあるスタジオに相談しますんで」

「『プリキュアV』ってのはどうやー！」

「「おおー！　それやー！」」

ええつと。

「ブイはローマ字で五や。五人揃って最高の奴ら、これに掛けてある」

「おおー！」

こないだ法事で伊賀上野の父方の里へ行きまして、大おばあちゃんみたいな人に「なにしていますの」聞かれました。「ええ、ゲームの開発などちよつと……」と答えますと怪訝な顔されました。隣で伯父さんが「わかるかおばちゃん？　『ピコピコ』や！」て叫びました。

ま「COOL JAPAN」言いまして世の中の認識なんざこんなもんです。

「えつとね、いいアイデアなんだけど、いいアイデアっていうのはもう既に使われてるも



のでして」

「せや！ 思い出した！ 『コン・バトラーV』 ってそれやんけ！」

「うわあ！ しもたあ！」

V・V・V ビクトリー。

一九七六年つまり三〇年以上前のアニメです。長浜忠夫監督・リードデザイン安彦良和、いわゆる「ジャパニーズ・ロボットアニメ」の基本を確立した作品です。

「……いや、プリキュアでもうあつたんだわ。『Yes!プリキュア5』」

「ホンマかいなー。さすがナガタやなあ、業界に詳しいなあ」

「今から業界紙とつとした方がええんかなあ……月なんぼぐらいすんの？」

「……逆に考えるんだ諸君」

「おつ。ツデゴーが長官みたいになってきた」

「『おやつさん』やな！」

まあ初代ライダーやウルトラマンを再放送で観た世代です、へえ。

「トップダウンで上手いかん時はボトムアップや。ええか、みんなのキュア・ネームを先に決めて、その総体としてのチーム名、これを考える」

「なるほど!!」

これはいい案ですね。

他人事だと人間いい案出るんです。

「ベッチはキュア・タキシード」

「おつ、イイネ」

「オノリンはキュア・ミルミル」

「しょうがないね」

「ナガタはキュア・オタク」

「甘んじて受け入れ……キュア・シナリオあたりにならんかなあ」

「モリモリはキュア・南都銀行」

「ちよつちよつ、ちよつと待つて、名前出してええんかなちよつと法務に電話して聞いてみる」

「もう帰ったはるって今何時や思てんねん」

「待て待てそれよりまだ決まってるから秘密漏らすな」

「宣伝になるから基本OKやろきつと。えーせやからこの四人を見回してやな」

「ちょっ、ちょー!!」

「なんやコキワ」

「オレ！ オレが抜けてる」

「あー……」

んー……

キュア……キュア……

……思い出せない……」

「思い出せよ!!」

「わかった！

キュア・メロンパン！」

「なんでやねん！」

「お前昔メロンパン売ってた言うてたやんけこないだ」

「メロンパンは売ってへん！

屋台で珈琲淹れてたんや！」

「ほとんど一緒やんけ」

「お前言うとかくけどな、珈琲バカにすんなよ」

「してへんて。」

俺のバカにしてんのはお前や」

「オレもバカにすんな。」

言うとかくけどな、オレは珈琲淹れさせたら日本で三本の指に入るで」

「「ほー」」

こんときみんなの「ほー」ほど「棒」っていう表現が似合う「ほー」は無かったですね。

「わかったわかったもうそんな興奮すんな。」

はい、キュア・スターバックスで」

「スタバみたいなまっずい店と一緒にすんな！」

だいたい珈琲通ってスタバ馬鹿にするよね。僕は美味い不味いより高めの設定で客選んで居心地良くしてるのが一番のポイントだと思います。

「なんやねんもーわけわからんほんだらお前勝手に決めろや自分で!!」

「おう!　ほんだら!」

キュア!

……キュア……キュア……」

「ほら出てけえへんやろ!?!」

「いやちよつと待つて思い出すから。」

キュア……

キュア……

あれオレなにキュアになる予定やったんやろう……」

「はいコキワだめー。」

ツヂゴーと入れ替えー」

「ちよつ、ちよつと待つてって!!」

「あー二六話あたりで一人交代でもいいよね。戦死して」

「おつ、さすがシナリオライター」

「待つて・って!!」

「ほななんやねん!!」

「だから三週間待つてくれ」

「もうええやろもうキュア・メロンパンで！」

キュア・メロンパンになるか、戦死するか、二つに一つや！」

「ううううう……わ、わかった！」

キュア・メロンパンで我慢する……」

「『我慢する』ってなんやねん！ ええか日本中にいや世界中にプリキュアになりたくてもなられへん人がいっぱいおんねんぞ!!」

「そんなもうイジメんというやあ……」

「じゃ罰として珈琲レヴオリューション」

「「おっ」」

「おっ、て何ー！」

「一人変わった名前入つてると引き締まるな。」

さすがシナリオライター」

「えっへん」

「嫌やー！ そんなん嫌やー!!」

オレもキュア・なんとかになりたいー！

子供の頃からの夢やつてんやー！」

「お前何を言うてんねんええか日本全国の野球少年に何人、何人プロのマウンドに立てる

子がおると思てんねん、中継ぎは嫌や、ロツテは嫌や、そんな贅沢言える立場か!!」

「そなこと言うたかてせつかく、せつかくプリキュアになれるのにお前、それ『ヤマト』で古代役やりたかったのに島役やらされるようなもんやぞ!」

島やつたら僕なら二つ返事ですけどね。

人間欲言えばキリがないです。

「あかん! 珈琲レヴオリュションか、メロンパン革命か、二択や!」

「あ、メロンパン革命もいいねー。さすがツヂゴー」

「おっほん」

「嫌やーーーーー!!」

「まあまあ、コキワのキモチもよーわかる。長年の夢やもんな」

「おつさすがベツチ社長、人心籠絡がお得意で」

「もう僕のこととはキュア・タキシードと呼んでよ。水くさい」

「そそ、ここは一旦ゼロ・ベースで考えなおして、コキワの得意なものにしたげようよ」

「キュア・ミルミルも優しいなあ。

ツヂゴー、ちよつと考えたろや」

「しゃあないなあもう……」

コキワお前クラブなにやってたっけ」

「キャメラ」

「こいつ写真部やん、ほら修学旅行とかの時に鼻の穴広げながらカメラ振り回してたやん」

「ちゃんと撮ってるって!」

「ナオンのツーケーをか。な？」

ナオンのツーケーをか」

「モリモリ、必要以上におっさんにならんでええて。俺らもうプリキュアやから」

「こんくらいはええやろ、営業できへんがん」

「とりあえずカメラ小僧でええか」

「ちょ」

「ほないくで! ベッチから時計回り!」

「キュア・タキシード!」

「キュア・ミルミル!」

「キュア・シナリオ!」

「キュア・関西の某地銀!」



「……えっ、えっ、えー……」

きゅ、珈琲レヴオリューション!!」

「五人揃って!」

「ゴ」ゴワッパ―5「プリキュア7」ゴ―ダム」レ「マイルス・デ」ごっつおもしろいおっ  
さんら」イビス・クインテット」ンジャイ」

「揃てへんやないか」

まったく長官のおっしゃるとおりです。

「ちよつとひとりずつ聞いわ、

まずベツ……いやタキシード、ゴレンジャイはあかんで」

「僕松つちゃん好きやねん」

「わかるけども。」

ミルミル出してきたアニメまた古いなあ」

「息子がな、朝ケーブルで古いアニメよー観んねやこれが。ほんで割とおもしろいねんこれ  
が。シンプルで」

「ウチもよー観る。古いアニメの方がオモロイな」

「俺その『ゴワッパー5』って単語三〇年ぶりぐらいに聞いたわ。でナガタイやシナリオさ、『7』てなによ。五人やん」

「『ウルトラセブン』は一人やろう？」

「あー……」

「『セブンスター』に『マイルドセブン』、あれ七本入りか？ ラッキーセブン、幸運の7やんか！」

今思いつきました。

「それでもセブン言うて五人は収まり悪いなあ」

「ほなツヂゴーお前入れや。あと一人ナースでも呼んで来い」

「ナース!!」

「いやいや、東映がまず五人で来い言うてるわけやから」

お医者さんは常に冷静でなければなりません。

「じゃあ『エロティカ・セブン』で」

「だから今問題は『7』であってエロかエロでないかやないんやつて」

「カラオケいこか後で」

「ミナミまで出る？ ほらこないだエンヤに連れてつてもらったとこ」

「あそこちよと高いなあ」

「決めてから、決めてから行こ。」

「ほんでモリモリ、子供たちの夢は壊したらあかん。」

『ごつつおもしろいおっさんら』って……そのままやか」

「素直が一番やで。変にカッコつける歳やないつてもう。親の面倒どうやつて見てくか考  
えなあかん歳やで」

「でもある程度は身だしなみも整えな。見合いにステテコと腹巻きでは行かれへんや  
ろ？」

「そおかなあ。ポロシャツぐらいでええねやろ？ ていうかナース紹介してよナース。  
な？ ナース紹介してよナース」

「あ・と・で。」

「まあしやあない。この四案で決を採るか」

「ちよつと待てつて。」

「オレの、オレの」

「問題外」

「なんでー！」

「実際の人物名を使うな！　しかもなんやマイルス・デビスで。巨匠中の巨匠やないか」

「オノリンかつてゴワッパ―5言うてるやん！」

「ミルミル」

「あごめん」

「ゴワッパ―の方はまだ子供向けっぽい雰囲気あるやろ!?　マイルスとか言うたら絶対大人向けやないか！」

「えっ、これ中高年向けちゃうの!？」

「中高年には言葉で丁寧に説明したらええねん、いま問題なのは子供たちや」  
「絶対ツゲゴ―鼯鼠してるわ。オレよりオノリンのことが好きなんや」

「ミルミル」

「あごめん」

「当たり前やろ、お前自分が女やったとしてオノリンと自分とどっち取んねん」

「そらお前……」

「オレやん」

「あー……」

先程よりさらに棒。

「えっ!? なに、50:50ぐらいやろ悪うても」

「学生時代から思てんねんけど俺お前のその根拠のない自信は才能やと思うわ」

「根拠あるつちゅーねん。根拠はオ・レ!」

「せやからー」

「あでもね、僕『クインテット』つて言うのはいいかな、と思った」

「ほら! さすがナガタ!」

「『プリキュア・クイン・クインテット』略して『プリキュアQQ』つてどう?」

「『おぉー!』」

「イイネ」「可愛いやん」「それでいこそれで」

「さすがナガタ」

「オレのアイデアやんかー!!」

「今ここで問題なのは誰のアイデアかどうかや無いんや。『みんなでプリキュアQQになる』という魂を磨いていくことやで。わかるか、コキワ」

「……珈琲レヴォリューション」

「すまん。」

わかるか、珈琲レヴォリューション」

「わかった。」

その代わり名前決めたの僕です言うてええ？」

「あかんで、だから」

「決定稿出したのキュア・シナリオやんか」

「嫌やー！ 嫌やー！ 姫ちゃんに自慢したいー！」

「じゃ珈琲レヴォリューションのアイデアを僕がちよつと弄りました、にしとくから」

「やったああ！」

「ツズゴー、やつばお前やれへんか。今からこんな権利関係うるさいヤツおったら、やれ怪人倒したの今日は俺やからギャラ多めに寄越せとかうるさいできつと」

「せやなあ」

「そんなことは絶対言わへん！

オレは金では動かん男や!!」

「ほなギャラは四等分な」

「「わーい」」

「いや、いや、ちょっと待って、そういう意味じゃなくてー」

「はいはいもう行くぞ、一発締めを決めポーズ!!  
いくわよ! みんなっ!!

変ッ・態ッ!!」

「製造直売だから安くて高品質!

キュア・タキシード!」

「乳酸菌が生きたまま腸に届きます

キュア・ミルミル!」

「ゲームから貴方の夢まで、なんでも描きます

キュア・シナリオ!」

「デフレの今こそマイホーム! ローンなら

キュア・南都銀行!」

「姫ちゃん観てる? パパだよ。」

珈琲レヴオリューション!!」

「五人揃って!!」

「「プリキュア・QQ!!」」

よし完成。

呑も」

「オモニ、マツコリおかわり〜!」

二次会はカラオケ行つてさつそくプリキュア・ソングの練習です。もちろんハートキャッチから。

「♪憧れ・未来・大集合〜」

「「YES!」」

「♪主婦にキャバ嬢・公務員。

ドラマチックに膨らむ〜」

「「ローン残〜!」」

そして満を持してオーディション、行きました。

ほなねー。やつぱプリキュア人気は絶大言いますかねえ、も老若男女めつちやよーさん受けに来てるんですよオーディション。みんな五人組で。大阪ドーム満杯ですわ。僕らのもらった番号札が「2525」とかね。



もうプリキュアなる気満々だった我々もちょっと驚いたんですけど、まあ周り見回したらこんなこと言うたらあきませんよ、こんなことホンマは言うたらあきませんねんけど、ド素人さんばかり。

も「プリキュア」ってだけで飛びついてきたのがありありわかる、なんの用意もしない人らばかりですわ。これは勝てるよ。いや勝てんまでも間違いなく最終までは残れるよ。元気出して行こう、声掛け合いましてね。

書類選考、水着審査、そしてダンス。もちろん僕らは得意のレジエンダリー・ソングをキツチリ、ユーロ・ダンスابلに決めましたよ。衣装？ もちろん、高校の制服ですよ。往年の少年隊もしくはシブがき隊って風情です。

イカスー。

舞台観てたライバル達から悔しそうな、でも「ヤラレタ」「コイツらには叶わない」という歓声が上がってましたわ。

で、やっぱり最終残って確認のための役員面接みたいなんですね。

「夢はなんですか」って聞かれて。

そもそももちろん僕はいつもどおり、いつもどおり

「みんなを笑顔にすることです！」

って歯に横に鉛筆くわえたみたいな素敵な笑顔で答えましたよ。

みんなもそれぞれ熱く語ってたなあ……

でも意外やったんわね、そういう大所高所からの夢や希望よりも、珈琲レヴオリューションの

「姬ちゃんにエエかつこ見せたいんです！」

が審査員さんのお心を打ったみたい。

やつぱりああいうときは本音、真心、これが効きますなあ。僕らは一つ、彼に教わりましたよ。作品始まる前からパワーアップしてしまった、「プリキュア・クイーン・クイーン・テット・クエスチョンズ」略して「プリキュアQQQ」ですわ!!

にこやかな笑顔で送り出してくださる重役達、これはもらったと。来年一年のスケジュール調整せなあかと。

さっそく打ち上げなんてことはせずに体調管理ですよ。プリキュアが酔いつぶれてるわけにはいかないですからね、喫茶店で軽くお茶して解散、もう今晚から各自走りこめと。

「……あら社長さん、お久しぶり。

いえ。もう、キュア・タキシード、つてお呼びしないといけないのかしら。フフフ」

「ハッハッ、ママは地獄耳だなあ。よしてくれよ、ここに居る時は戦いを忘れて……ひとりの男でいたい」

「フフフ……プリキュアになっても、可愛い人ね」

「ハッハッハ。それが個性さ」

「あな……ミルミルさん。お忙しいでしょうけど、次の日曜、服を買いに連れてつてくださらない？」

「ん？ なにかイベントでもあるの？」

「なに言ってるの、プリキュアの奥さんが変なカッコ、できないでしょ？」

「いやいやー、そんな気を使わなくても平気だって」

「いいえ。私じゃなくて、あなたを悪く言われるのは耐えれないわ」

「おまえ……」

「あなた……」

「キヤーッ!! キュア・モリモリさんがキタワア!!」

「「キヤーッ!!」」

「おいおいおいまだ本決まりじゃないから。まあまあ今日ぐらいはドンペリ開けるか」

「「キヤーッ!!」」

「ねえ私もプリキュアなりたーい! モリモリさんのお力でなんとかしてよう!」

「ハッハッハ、無敵のキュア・南都銀行にもできることとできへんことがあるんや……スマンな!!」

「ケチ!」

「その代わり、『プリキュアの彼女』にやったらなんぼでもしたんで……」

「キヤーッ! そっちの方がいいかもー!」

「おとさん、おとさんぷりきゅあなるの?」

「なるよー! おとさんはプリキュアに、なるんやよー!」

「おとさん、おとさんはなにぷりきゅあなの?」

「おとさんはネー、珈琲・レヴオリューション!!」

「……おとさん、ぷりきゅあちがう」

「いやっ!!　ちがう姫ちゃんこれはプリキュアやねん!!　なんて言ったらええんかな」

「おとさんぷりきゅあちがうっ!!」

「いやいやいや、いや、えーごめん今の無し!

ホントは、プリキュア・珈琲!!」

「……ほんと?」

「本当だとも!」

「わくわく!　ぷりきゅあ、ぷりきゅあ、こうひい、こうひい」

「あんた、子供に嘘は」

「明日みんなに相談するから。相談するから。いざとなったら前の会社の上司から東映にねじ込んでもらうわ」

僕は父親の墓参りに行きまして、ラッキーを運んでくれた「2525」の番号札見せて報告しました。

不肖の息子でしてね、孫の顔とプリキュア姿、見せてあげたかったなあ。

……ところが。

ま人間好事魔多しと言いますか、電話来ましてね東映のスタッフから。

心臓飛び上がりましたよもちろん合格や思て信じ切ってましたから。

ところが。

なんとね、合格も不合格も何も、企画自体が無くなった、こう言いますねや。

「なんでなんですか!? いや、これは怒ったりしてるわけではなくて、意味が分からな  
い。あれだけ盛況で優秀な人材がしのぎを削って、僕らみたいな煌く才能も居た。それで、  
なぜ」

「いやあ……それがですね、誠にあいすみませんことながら、リーマン・ショックの折り  
から狙いとする主力購買層の中高年に、グッズの購買力が無いと。こうバンナムさんの方  
から待った掛かりまして」

「そんなアホな、あの人ら孫娘のためにココロパフュームをダースで買いますかな」

「孫のためには出すんです。自分たちのために出さない。老後が不安なんですかねえ…

…」

「団塊の世代お金ありますやん。日本史上一番いい目見てる世代ですよ。ウチらの親の  
世代ですけど」

「まあ、そうなんですけどねえ。」

シナリオさんって、元シャープですよ。履歴書に」

「え、はあ、そうです」

「ウチも買いましたよアクオス！

綺麗ですね〜」

「はあ。ありがとうございます。」

いや、話逸らさないでくださいよ、今問題は、ここ、ここを頑張らんでいつ頑張るのかと。いま、今諦めたら一生後悔残りますよ、『あの企画あそこで諦めなけりやなあ……』って。僕も元企画屋だからわかります、企画にはキバリどころネバリどころがあつて……」

「いやあ、僕も個人的にはやっていいと思うんですけどねえ。上の決定で……選択と集中ってヤツですねえ。まだ見ぬ地平に飛び込むよりは、今まで愛してくれてる子供たちをもつと大切にしよう、と」

「それはオトナの詭弁だわ……」

「また次！ また次企画が立ち上がりましたら一番にお声お掛けしますんで！」

「そんな言い方されて声掛かってきたこと一度もない」

「まあまあそんなにスネないで。」

『プリキュア・クイーン・クインテット』

ならどこでも席がありますよ!」

「だからプリキュアにしてくださいよろしく!」

ま、そんな哀願でお上の決定が覆るわけもなく。

みんなに連絡する時辛かったなあ……

罵声とかね、浴びたらまだいいんですけど、みんな一様にズドン落ち込んで。暗ーいちっちゃーい声で

「……わかった……」

って呟くんです。いたたまれませんでしたよう。僕が悪いことしてるみたいな気持ちになりました。僕だつて落ち込んでるのに!

ミルミルのね、

「まだそれやったらどこかのチームに負けた方がよかったな」

という言葉が印象的でした。そう、それだつたらそのライバル・プリキュアを観ながら、僕こいつらに最後で負けたんやなあ、つて悔しく思えるじゃないですか。番組自体が無かつたら、そんなことも思えない。



諸行無常。永遠に同じカタチのものは無し。頭でわかつてはいても、心は辛い。

……ええ、つい先日残念会を例の思い出の韓国居酒屋でやりまして。ツチゴも来てくれしましたよ。

「君ら笑いに來たわ」

言うて憎まれ役買つて出てくれましてね。でもね、そんな時、珈琲レヴオリューションが「次やるときはキュア・珈琲でいい？」

つて言うもんですから。

ああコイツホンマ前向きやな、と。１ミリも諦めてないと。

見習わなあきません。

そう、勝つまで戦えば、敗北などしないのです。

——今も日曜の朝、プリキュア観てますと、あの日五人で披露したテーマ曲「箱根山体操」を思い出します。きつとこれ流行つて、全国の小中学校で歌われながら踊られるようになって、母校から「ウチの名物をなんてことしてくれるんだ」つて微笑まれながら怒られる……

そんな夢は、今はまだ、夢です。

諦めなければ、きっといつか、夢は叶う。  
そう、僕らはまだ、諦めてはいません。

♪箱根の山はー 天下の険（プリキュア！）  
函谷関も 物ならず（クイーン！）  
万丈の山 千尋の谷（クインテッド！）  
ハイ！ ハイ！ ハイハイハイ！

## Diplomacy

人間の運命なんて、決まってるんじゃないか、と思うことがありますよね。

僕の親友に田中（仮名）というのがあります。

コイツが生まれた時から経済オタク、中学生の時にすでに日経の株式欄を見ながら、ヴァーチャル株取引をして何円儲けたスツた、というのを楽しんでた男です。  
変態でしょ？

彼との因果は小学生時分までしかのぼりまして、当時関西圏では有名な中学受験の進学塾があつたんです。内紛起こして潰れちゃたんですけどね。そこが月一回、五百人規模のオープン模試やってまして、お恥ずかしい話なんですけどワタクシ当時はそこそこやれまして、上位に名前が載ったりしたんです。そして毎回結果が、上位ランカーの名前入りで送られてきます。

それを見て彼はどうも（他にも上位常連は居るのにもかからわず）僕にライヴァル心を勝手に持つてくれてたみたいで。たまさか同じ中学に入りまして、

「貴様があのながたか」

「そう申される貴殿は」

「俺は田中。あの公開テストで上位に食い込んでた空白の男。ザ・スペースマン」

「ザ・スペースマン」

そうそう、塾生は名前載るんですけど部外者（テストだけ受ける人）は名前載らないので空白になるんです。確かにそういや上位に空白あったわ。

「そうか……貴殿がああ」

「ああ覚えておけ。お前の宿命のライヴァルだ」

「はあ」

そんな我々も進学校入りますと全く凡庸でして、ええ、お勉強も野球なんかと全く同じです。中学のエースで四番が、強豪の高校入ると球拾い、そんな感じ。

二人して球拾いながらなんとかお互い高めあいましたね、志望校目指して勉強しました。

やつは数学が得意なんです。ほんで、ラーメンが好きなんですから、「エンジニアになって日清食品に入り、月でラーメンを作る」

という夢をみた。

笑ってますね？

マジマジ。これマジ。作った話じゃなくてホントウ。八〇年代後半って、トップクラスの頭脳が普通にサラリーマン・エンジニアを目指したんです。ああモノづくり日本、過去の栄光。

で、高二に上がるときに理系文系分かれまして、彼はもちろん理系へ。ただどうもやはり、理系の特に理科系の学問が肌に合わない。

「はやぶさ」帰ってきて大騒ぎしたり、新しい電化製品に萌えたり、文系の好奇心と理系の好奇心ってちよつと違うんですよね。

そこでスッパリ日清食品のエースになる夢は諦め、文転です。

ズルいんですよね、文系の人間って基本的に数学苦手ですから、そこへ殴り込めば高得点連発で一氣に上位に名乗りを上げる感じ。大学どこでも行けまつせ、となつて彼が選んだのが、とある大学の経済学部。

「おお、お前には経済学部しかない」

「そうとも。いいか、歴史は政治が作るんじゃない。経済が作るんだ」

笑ってますね？

いやこれもホントウ。僕この耳で聞きました。

そうそう、田中ね、歴史大好きなんです。小学生の頃から「昭和の歴史」全一五巻みたいな本をなんども読み返して、ちよつと似てる昭和天皇にシンパシーを抱いたり、そういう歴史少年。

もちろん、「おくい竜馬」リアルタイム直撃世代であり、竜馬超大好き。なんかのキツカケで幕末の志士たちの話になり、僕好きなのは桂小五郎なんです。美形でモテて歌うまくて逃げ足早くてでもみんなに頼られて、デカイ仕事キツチリやつてしかも殺されず普通に死ぬ。あんな夢みたいな人生がありますか。厨二全開の私が得意の悪口をいう訳です、

「竜馬なんて自分の重要性わかってへんから暗殺されるんや。ま、その程度の認識しかできてへん小物やね」

「……」

いつものように切れ味鋭い反論は飛んでこず、あれ？と思ってよく見ますと瞳に涙をいっぱい溜めて

「竜馬は……」

竜馬はおれの中で生きてるんや!!」

笑ってますね？

いやこれもほんと。僕この耳で、ええ。

熱い男の子って、いいですね。

まそんなこんなで、彼と僕、とある大学の経済学部に入學しました。

八九年九〇年といえバブル絶頂期。ウチの大学で合格者最低得点率が経済学部、法学部、つまり「経済学部の方が難しかった年」は九〇年が最初にしておそらく最後です。

彼は意気揚々と、まさに水を得た魚、経済学部ライフを満喫するわけです。水泳サークル、自転車サークル、予備校のバイト、放浪っばい中途半端な一人旅、そして憧れの下宿



での一人暮らし。

最近「中二病」ならぬ「大二病」つまり大学に入って地味な子が一気に弾ける様子を表す言葉がありますが、まあ大二病満開です。もちろん僕もね。そういう時代でもあったんです。僕が「カルボナーラ」っていう料理食べたの、大学入ってからですよ？

もちろん恋もしました。僕その彼女さんから「彼はどんな人ですか？」と見合いの聞き合わせみたいな問い合わせを受けまして、「はい、大丈夫です、はい」と脂汗流しながら必死で答えた経験あります。

いやホントに、エエ男でして、自分が惚れるのは勘弁ですけど娘ならやらんでもない。そんな感じ。

でね、順調に経済の学を修めまして、さあ就職だ、っていう話になるわけです。当然彼は、大手の銀行か、あるいはキャリアの試験でも受けて大蔵省（今の財務省）や通産省（今の経済産業省）を狙う、または日銀や輸銀みたいな国家財政の根幹に関わる場所……を目指すもんだと思ってた。ところが、

「外交官になる」

と言い出した。

プチ・モラトリウムといいますが、大学生活が華やかなら華やかなほど、泥水に塗れる社会人になるのがなんとなく嫌で（なってみればその泥水浴びにも結構楽しいこといろいろあるんですけどね）そういう「見果てぬ夢」を見がちです。

彼は中国に数週間の中国語留学なんかもやっててですね、そういう「世界を見たい」という欲も急に膨らんだんでしょうな。

まさに「今竜馬」です。

しかしながら、外交官ってのは超エリート、古今東西その国のベスト&ブライテストになる職業です。そう簡単に「なりたい」言うてなれるものではありません。なにより難関が「外交官試験」。知力・体力・時の運、すべてを問われかつそれを目指す優秀な人材が黒山のように集まる、司法試験や医師国家試験、大型二輪免許をも上回る超・難関試験です。

彼は必死で勉強を始めました。彼の要領の良さと高い自己客観視の能力は中学高校から

折り紙付きで、たとえば試験終わるでしょ、僕なんかですと「百点だ」と思ってるわけですよ。

だーってそうでしょう、そりや数学なんかでね、真つ白だったら無理ですよ、でもなんか書いたら、それはこの俺様が知恵を絞って答えた答えなんだから、正解に違いないと。つまり百点。

ところが彼は「八五点だ」っていう訳です。

「これとこれとこれは間違ってる」

「いや、合ってるように努力しようよ」

「わからない時点で負けてるから、たまたま点が入ってもそれは実力じゃない」

カッコイイですね。

ほんでまたすごいのが、直後に正解が貼り出されたりしますと記憶だけを頼りに答え合わせをして、「やつぱり八五点」つって、でかつ答案返つてくると八五点なんです。

僕のバンザイ・アタックとは真逆で、まあ、だから今に至るも仲がいいんだと思うんですね。

でもそんなスーパー・ボウイの彼にも、そうヒーロー達もなにかひとつは弱点を持つものですね、ドラちゃんはずミ、ハクシオン大魔王は犬、斬鉄剣はコンニャク。彼はねえ、あらゆる教科の中で「英語」が一番苦手だったんです。

あのね、よく英語系の先生が「語学は国語力が高くないと伸びない」とかおっしゃいますけどあれ、嘘！

証拠は田中と僕です。二人とも国語なら学年一を争うような力を発揮しながら、英語になるともうカラッキシ。

やっぱり構造そのものが違う言語なんで、日本語に最適化しすぎると他言語にチューニングが合わないんじゃないかと……

田中の英語力がどのぐらい優秀かのエピソードとしては、僕らが高校在学中に近くの阿倍野近鉄百貨店が大増床してリニューアルしましてね。

遊びに行ったわけですよみんな。

新しくおしゃれになったいろんなお店をワクワクしながら見ていますと田中、

「……おい、A Dのコーナーはどこやろ？」

「A D？」

アシスタントディレクターあるいはアドバイズメント？ そんな関係ないし……

「ほら、C Dとかビデオとか置いてある店」

「ひよつとしてオーディオ&ビジュアルつまりA Vのコーナーですか」

「あそれ」

このぐらい。

ま、とにかく彼は充実した他学科の能力に比して楽しい英語力が弱点でして、僕は聞いたんです。

「そんな英語力で大丈夫か」

「大丈夫だ、問題ない。」

赴任は中国かアフリカのどこかを希望する」

いや、俺の聞いたのは試験の突破で……

てか中国でもアフリカでも英語要るやろ。

でも黙つとききました。奴は言い出したら聞かないO型次男坊なんで。

「……でもお前は普通に銀行行つたほうがええと思うけどなあ……」

「バブルは終わったんや。今銀行行つてもビッグな仕事はできへんで」

「そりや波があるから、また一〇年二〇年すりや経済の時代もくるさ」

「いいの！ 俺は外交官になって、国際会議で日本代表になるの！」

彼、こう見えましても高校時代サッカー部のキャプテンでしてね。ポジションはピッチの中央で司令塔として君臨する右サイドバック。しかも、誰よりも運動量が多かった。おやつのパン買いに行ったり、破れた靴下の替えを買いに行ったり。ベッケンバウアーが「皇帝」なら彼はまさに「パン買うてー」。

もちろん当時の僕らの学校のサッカー部のユニフォームは世界最強ACミラン・レプリカ。そう、彼は憧れの「日本代表」に……なりたかったのかも、しれません。

さあいよいよ、外交官試験です。各学科を猛勉強の甲斐もあつて次々にそつなくこなし、

最後の学科が問題の、英語。

ひとつ、ひとつだけ、わからない単語があったそうです。

しかし彼は鍛え抜かれた日本語力、前後の文脈から類推する能力を駆使し、なんとかたぶんこれでいいだろう、という訳をでっち上げました。

彼的にはまずまず手応えはあったそうです。

ですが念のため、試験後、同じく受験してた友人に聞いてみた。

「なあなあ、『diplomacy』って何？」

友人、目が点に。

そりやそうです、diplomacyの訳は、

「……『外交』」

はい、もちろん落ちまして。

でもこの話してくれた時の、彼の爽やかな笑顔は忘れられません。

「そらあかんわな、あつはつはつは！」

人間、「やってみてあかんかった」、これもとても大事です。諦めもつきますし。

彼は無事その後とある政府系金融機関に潜り込みまして、銀行マンとしてバリバリ働いています。やはり性に合ってる仕事の方が力が出るもんで、数年後、その能力を見込まれて金融庁へ出向になりました。そして国際会議に、財務大臣ご一行として出張ですよ。そうまさに、日本代表の一員として、国際会議の片隅にちょこん、と。

夢が叶いましたな。

その時名刺忘れていって、パリの街中でゲーセンに駆け込んで子供向けのピングーの絵柄で名刺（カード）が作れる機械で一生懸命作って、それを各国要人に配り倒したあたり、さすが田中だ、と唸りました。

まさにクールジャパン・ディプロマシー。

運命って、おもしろいですね。



若者は挫折を「不幸」だと考えがちですが、それは間違いです。

あとから振り返れば、そのつまずきは不幸でもなんでもなく、むしろあとからくる幸福への「導き」であつたことも、多いです。

diplomacy を知らない外交官もありえないし、日経読んで仮想株取引やつてた少年が金融の仕事に就かないはずもない。

世界つてのは、「そういう風に」できてます。

## 丸木舟速報隊

エイ・サー！ エイ・サー！

エイ・サー！ エイ・サー！

掛け声を掛けあつて、若者達が漁に出る。

「サバニ」と呼ばれる丸木舟である。

帆をひとつ張る。風がないときは、同じく丸太から切り出した粗末な櫂を漕ぐ。

五人乗りだ。

全長は約一八尺（約五メートル）。幅は六尺（二メートル）ほど。原始的な作りだが、ゆえに決して壊れず、決して沈まない。

つまり乗員の体力と気力次第で、椰子の実のように地の果てまでもゆくことができる。

「……きょうもいい漁だったなあ！」

「うん」

お調子者の智（サト）が満面の笑みを浮かべ、みなに叫ぶ。残りの四人もそれぞれの笑みを零す。舟いっぱい積み込まれた獲物は、トビウオである。そのまま食べてもいいし、

干すと出汁が濃くなりさらに旨い。

五人は、いまや島で一番の漁師だった。

幼馴染の五人は、本来ベテランから若手まで年齢ほぼ等間隔で五人組を組む島の慣例を破り、若者達だけで一つの舟を出した。眉をひそめる大人もいたが、結果が出ている以上、強くは言えない。

先ほど静かに領いたのが善（ゼン）。リーダー格だ。すこし童顔で普段はとてもおとなしいが、どこか人を引きつける力があり、今という個性派ぞろいの五人をよくまとめる。時に大胆でもある。最終的に五人で舟を出そうと決めたのは彼だ。

「海ちゃーと玉緒さんにがんばって売ってきてもらわんとー！」  
「はは」

海は智の恋女房で、子がすでに二人いる。玉緒は善と祝言を挙げたばかりの、新妻だ。男達が獲ってきた魚を、女達が売りにゆく。早く獲った舟が待ちわびる近くの村落に早く

売りに行ける、つまり楽に大きく稼げる。

そう炊きつけたのが力自慢の勇（ユウ）。島一番の大男で、その怪力は古老も記憶にないと唸るほどだ。もちろん、島中の舟からスカウトされたが、友の舟を選んだ。舟では主エンジンと言つていい。舵前で最も大きな權を力強く繰る。

笑つて舵を取るのが、真（シン）。勇とは対照的な瘦身に肉は薄い、彼の武器は別にある。方向感覚である。「渡鳥のようだ」と評されるそのふしぎな力は、真夜中、眼を閉じていても正確に南を識ることができるほどである。この舟がいち早く漁場に駆けつけられるのは、彼の力に負うところが大きい。

「……なんだろう？」

もう島だ、という時に先頭で見張りに立つ礼（レイ）が小首を傾げた。女のような美男子で、その仕草さえまさに芝居的一幕のよう。だがその涼しい目は、いつも誰よりも早く魚群を狙う海鳥の群れを見つける。

「……島司さんだ」

老いた島司が船着場に出てくることなど滅多にない。智は、嫌な予感がした。

——船着場に着いた。魚を揚げようとする海と玉緒を押しつけるようにして、島司が善にすぎりついた。只事ではない。

「善よ、頼みがある。頼みがあるんじや。わしゃもう、どうしていいのかわからん」

いつもお宮の縁側に、まるで彫刻のように微笑みながら座っている島司が、血相を変えていた。五人は、顔を見合わせた。

ss

その国は、戦争をしていた。

相手は露の国という大きな大きな国である。「とても勝ち目はない」と世界中が思つて

いたが、意外にも善戦していた。

ひとつには相手が小国と侮ったこともある。が、もうひとつに地理的要因がある。露の国の都から見れば地の果てと言つていい遙か彼方に、このちいさな国があつた。自然、陸の兵隊も海の艦隊も遠路はるばるを旅し、そして戦わねばならない。

また、その国中に、「この戦に敗れば国そのものが滅びかねない」という危機感があつた。いやむしろそれだけが、この国の戦士達を、そしてそれを支える民々をも勁くしていた。

だが、そんな大きないくさも、絶海最果てのこの小島には、なんの関係もない……はずだつた。

戦は、嵐のように何もかもを巻き込む。

連戦連敗に業を煮やした露の国の皇帝が、ついに切り札を切つた。世界最大の威容を誇る大艦隊を、この国に差し向けたのだ。

本国内海奥深くで近隣諸国に睨みを効かせていたその巨艦、それに載る巨砲の針山が、

我が国に来る。

「さすがにもう終わりだ」

「遂に皇帝を怒らせた」

と世界中がその小国の行く末を哀れんだ。

ちいさな国にも、艦隊はあった。背伸びに無理を重ねて、質的には劣らないものをなんとか買い揃えた。事実、元々この地方に配備されていた露の国の艦隊を港に釘付けにしたり、健闘はしていた。だがかし……

人間には、二種類ある。

知らないことを強みにする人間と、知らないことで弱くなる人間と。優劣はない。前者はそれが故に大怪我をすることもあるし、後者はそうであるなら知ればいいだけのことだ。この場で言うなら、若き善は前者で、老いた島司は後者だった。

島司の家の暗い土間で、善と智と島司、三人が向かい合っていた。老夫の目から、涙が止まらない。



「……露の国の船が来てしもうたら、わしらはもうお終いじゃ。殺されるか、奴隷にされてしもうて、海の向こうに売り払われる……その前にいつそわしらの海に身を投げんかと……」

「あああ、島司あ、つまりつまり、なにがあつてなにをおつしやりたいんですかあ!？」

暗い呟きを続ける島司に、智が大声をあげた。独りでさめざめ泣かれても、何も話は進まない。

「……島司、戦の話は知っています。先日出た御触れ、『見知らぬ巨きな船を見かけたら、直ちに知らせるように』とのお達しも覚えています。礼がいつも鳥だけでなく海の向こうを見てくれています。だから」

善がその名の通り穏やかに、本当の祖父に接するように言葉を掛けた。その腕を取り、叫ぶ。

「その船を、見たものが現れたんじゃ!!」  
「「ええっ!?!」」

ということとはつまり、この近くでまもなく、大きな海の戦が行われるということか。

「このミヤコまでナハから荷を運んでくれる、牛という男がおる。これが途中で露の国のいくさ船を見た、というんじゃ」

「確かですか。わが方のいくさ船ではないのですか」

「黒い船、黄色い煙突。間違いない。御触れにあつた通りじゃ。数は三十も四十もおるといふ。じゃからどうしたものかと、昨日の夜遅うから島の主だつた者を集めて知恵を絞つたのじゃが……」

「……島司、もしや頼みというのは」

智が割つて入る。

このミヤコには、他の島に連絡する手段がない。そうやって遠路ナハから来てくれる商人の帰りか、週に一度来る汽船の定期船を待つ他はない。が、事は一刻を争う。

「……イシガキに、電信がある」

「無理無理！ そんなことできるわけない！」

イシガキまで、百海里（一七〇キロ）ある。むろん、さすがの島の男達も、丸木舟で日常的に行き来する距離ではない。

「このこと、なんとしてでも都にお伝え申さねばならん。もし伝えずにあとでわしらが知っていたことが知れたら、島は子々孫々まで笑いもんじや。いや笑いもんならええ。呪われ続けるやもしれん。

この知らせ一つで、いくさの趨勢が決まってしまうかもしれんのじゃぞ」

老人は、足りない体力を補う言葉の力を持っていた。

「……善、頼む。お前たちしかおらんのじゃ。

……この、とおりじゃ」

そして老人には、恥じらいはない。

孫より若い善に、すがりついてこすりつけるように頭を下げた。

智が、鼻で笑う。

「都合のいいときだけ」

智は五人で舟を組み始めた頃の、大人たちの冷笑と侮蔑をよく覚えている。青二才に何が出来るか、しきたりを破るとろくな死に方をせぬ、と否定的な言葉と態度ばかりを浴びた。

わかってない。

開化以来、遠く本土はもとより、ナハでも漁法はどんどん進歩していた。大型船数隻で船団を組み、巨大な網をもって文字通り漁場の魚を一網打尽にしていた。丸木舟一艘ごとが、まるで競技のように相争う、などということをしては、いつか取り残されてしまう。

五人は我が身を張って、新しいやり方に取り組んでいた。それがひいてはみんなのためとも思つて……

「俺らをさんざん笑ってきた、立派な大人衆のどなたかがいけばよろしいでしょう。島の代表として。俺らみたいな青二才の出る幕じゃないですね！」

「智」

たしなめる善。そして島司の腕をとった。

人を率いるということはすなわち、「己の客観化」ができる、ということだろう。

智の気持ちも自分も当事者だけによくわかるが、今、この事態に島でどの舟を出すか、となれば、最も若く最も技術のある、我々になる。

僕自身でもそうするだろう。

「いや善待で、俺はなんにも意趣返しで言ってるんじゃないぞ。

……空が悪い。時化そうだ。時化たら終わりだ。あの海には、なんにもない」

智は天候読みに評判があつた。ただのムードメーカーではない。

「……サバニは、沈まないさ」

「おい、お前」

物心つかぬうちから兄弟のようにして育ってきたとはいえ、改めて呆れ果てた。死にに

行くようなものだ。

「行つてくれるか！」

「島の体裁なんかどうでもいいだろう！ 死んで花実が咲かん！」

「体裁なんかじゃない。聞くに大陸の方では、我が国の何十万の人が戦っているそうじゃないか」

「他人だ！ 今は俺達の命が」

「他人じゃない。」

「僕らと同じ、漁師や、百姓だ」

「それは」

「僕らと同じ、若い衆さ」

「……」

確かに、国中の漁村農村の若者が、今も見知らぬ大地で血を流して死んでいる。傷つき、腕を足を無くしている。そして彼らにはまた、親が兄弟姉妹が妻が夫が恋人が、そして子どもたちが、居た。

俺達にもなにかできないか、と語ったこともある、が、なにもできない、と目を瞑り耳を塞いだ。

我が身が可愛い、それもある。

が、それより、「なにもできるはずがない」という諦めと思い込みが、そこにあつた。

いまここに、できるなにかが、ある。

「この海の戦に負けたら、もつと死ぬんだろう。

……なんとか、力に、になりたい」

「……」

善の言うことも堪えるし、あるいは善ならば、いや俺たちならばなんとか辿り着くこともできるかもしれない。しかし……

智は、ズルい手を打った。

「……俺は行かん。行くなら四人で、いや、礼と勇と真にも聞いてみりやいい。みんな、行くとは言わんさ」

「その時は」

毎度のことだが、言い出したら聞かない男だった。指揮官というのは、ある程度頑固でなければならぬのだろう。

「……僕一人で行くさ。その方が気が楽だ」

「……阿呆が」

これは、期待薄だな。  
智はそう思った。

ス

善は家に帰ると、心配気に待っていた玉緒に「粟を少し」と告げた。航海食料である。



「どちらへ」

「ちよつと、……」

言わない、ということは言えない、ということである。玉緒は夫の顔を覗き込んだ。いつもと変わらぬ、いやいつもよりも凛々しく、目元が鋭い。

信じることにした。

どうせ言つても、聞かないし。

きつとまた、五人でなにか悪巧みをするのだろう。

戸口で、「気をつけてね」といつもどおりの声を掛けた。と、いつもと違った反応が帰ってきた。

ほんの軽く抱擁され、軽く頬を寄せられた。今までそんなことただの一度も、無い。不意に玉緒の眼に涙が溢れた。

それを見ないようにか、善は振り返らずに船着場へ向かった。

真は遅い子で、老いた母と二人暮らしである。こつそり粟を用意しようとして、見つけた。どこへ……

「……ちよつと、新しい漁場を探しに、善たちと」

「まあ、今から？ 休んで明日おゆきよ」

「智が大丈夫だ、って」

「あの子はいいかげんなところがあるから、何でも言うこと聞いちや駄目だよ」

「あはは。大丈夫だよ。勇も礼もいるし」

みな、友人のせいにした。すまない。

不安げな母を残し家を出て、隣家の叔母に声を掛ける。叔母は血相を変えて出てきた。もう村中に、「善たちが軍艦のところへ行く」という変な噂が広まっていた。否定も肯定も出来ない。

問いつめる叔母に、母をよろしく、とだけ告げた。叔母はまた、顔色を変えた。

礼には家族が妹一人しかない。正しくは赤の他人なのだが、村唯一のお寺の住職さんに、天涯孤独な者どおし、兄妹のように育ててもらった。

別れづらかった。

が、いかねばならぬ。

善たちも大切な、兄弟である。ぼくの目がなければ、困る。

いもうと、憐は、活発で男勝りで威勢が良く、まだ若いのに玉緒や海の仕事もよく手伝った。漁師の嫁にぴったりであり、頃合いを見計らって、誰かいい人を見つけてやらねばならない。いやそれこそ、勇か真はどうだろう。そんなことを思っていた。

だから、少し遠くへ行く、長く空けるかもしれないと告げた時の突然の行動に、面食らった。

「……こつ、これ！」

櫛を差し出した。

それは村では髪を、つまり命を差し出すのと同じことであり要するに……妻にして欲しい、という求婚の証だった。

噂を聞いて動転しているのだろう、と礼は動転しながら思った。大丈夫だから、と慌てて手を振ると、受け取ってもらえないのか、と濡れた犬のように体全身でしょげかえった。致し方なく、櫛を懷に舟に向かった。どうすればいいんだ？

…

勇は子どもたちの人気者である。おおきくて、つよくて、やさしいお兄ちゃんは、いつの世でも子どもに懷かれる。

さてどう告げたものかと、勇は珍しく悩んだ。

帰らなければ、悲しむだろう。ちいさな子どもは、人の心を読む。いつもと違う様子を問う。

「どこへいくの」

「……ちよつと遠くの島へ。みんなに飴玉を買ってきてやろうと思ってな」

「あめだま？」

「そう。甘いぞう。ひとつ食べるだけで一日中口の中が甘いんだ」

「……知らない」

子どもごころにもそれが嘘だとわかるのだろう。そして、それがつきたくてついでる嘘でないことも。

わんわん、わん。

犬のチビまでもが、両手を伸ばしてその背を搔いた。着物の裾を、袖を、襟を、子どもたちが掴んだ。

「……すぐに帰るよ」

振り払うように立つた。これが、嘘にならなければいい。

（……阿呆どもめ）

まさか三人とも善の言葉に即座にうなずくとは思わなかった。家路を急ぎながら智は思った。

しかしこうなれば、己もゆくしかない。兄弟のような友四人が危険に旅立つのを黙って見過ごすなどということは、美学からしてできぬ。

それよりも、抑えきれぬ好奇心があつた。百海里は確かに遠いが、帆船でも大きな船ならば行ける。つまりはサバニでも、時さえ掛ければなんとかなるのではないか。

少なくとも島の歴史に知るところそれをやつてのけたのは誰もいない。誰もやったことのないことをするのは、単純に男の子の悦びであるが。

「……サト！」

愛妻が、飛び出してきた。

「まさか、まさか行かないよな!? な!? まさか行ったりしないよな、軍艦のところへなんて！」

最終的に決を下したのは善だが、五人で船を駆るアイデアを出したのは智である。つまり、天邪鬼だ。常識や慣例をまず疑わなければ、進歩も革命も無い。

「普通」を押し付けるような海の目に、逆に反発した。

「……行かんわけにはいかん。あいつら、兄弟みたいなんだ」

「四人で行けるよ！ サト、ウチのやや子はまだちいさいんだよ？ サト、サトがもし…

…」

「まあまかせろ！ 危ないことなんかなにもない！」

死ということばを言いよどむ妻の肩を強く揺すった。幸い、二人の子らは海の父母の家

に預けてある。顔を見たらおそろく、決意が鈍、いや、翻っただろう。

だが海は、いつも行動のひとつひとつに意味や理由を説明してくれる智が、そんなおおざっぱな物言いをしたことに逆に不安になる。

「けど！」

「ああうるさい！ 俺あ、行くと言ったら行く！」

「……齧り付いてでも行かせないよ！ それが妻の務めだ！」

「なら、離縁だ」

海は息を呑んだ。そんなことまで、あの、私と子どもたちをなによりも大切にしてくれている、智が言うなんて。

「なにを言うの！」

「上の家におかえりなされ。今日いまから、あなたとは夫婦でもなければ家族でもない」

「……じょうだん、だろ？ じょうだん、だよな？」



それには応えず、智は黙々と持ち物を用意した。

とつさに口を突いて出た言葉だったが、出してしまえばすつきりした。もし……もし、なにかあつたら、海ならまた誰かいい人を見つけて、走と空を立派に育ててくれるだろう。それでいい、と思った。

「……サト、ちよつとこつち向いて、サト！」

「……」

饒舌な智だがもう、言葉は発しなかった。なにか言うと、声が震える。

ス

出航の準備は整った。島司、長老たち、手のあいた島人達は、遠巻きに見ている。「なにも問うてはならぬ」と厳しく言われた以上、そうするしかない。

「……うお〜い」

「あ、来た」

「お」

先ほど四人に放った罵声などまるでなかったことのように、島人の垣を割って智が来た。米俵のような大きな荷物を背に担いでいる。

「……待たせてすまん。よつと」

「なんだそのおおきな荷物は」

「長丁場になるかもしれんからな。ありだけ持ってきた」

他の者は、粟二食分を小袋に入れただけだった。

「相変わず用心がすぎる」

「これだけありやあ、潮に流されてタカオかシナまで流れ着いてもなんとかなる」

「悪い冗談はやめてくれ」

「ははは」

「……さて」

不安を軽口で誤魔化す皆を見回して、善が言った。

「……焦らず、少しずつ、いこう。  
漕ぎ続ければ、いつか、着くさ」

他の者は、黙って頷いた。

砂浜を浅瀬を、頼みの丸木舟を押し駆けて、乗り込む。いつもどおり、前から礼、智、善、勇、真。

エイ・サー エイ・サ

エイ・サー エイ・サ

櫂を漕いで、帆を上げる。帆を繰っていた礼が、陸に向かって大きく手を振った。

「……みんな」

いつしか見送られていた。玉緒が両手を合わせる真の母を支え、憐が泣き崩れる海の背を抱いていた。子どもたちと、チビが走り回っていた。

若者達は、一度きり大きく手を振って別れを告げた。なるべく見ないようにした。智にいたっては、手も振らない。

「智、海さん」

「さつき別れてきた。なんどもは、いい」

ぶつきらぼうだったが、それが照れ屋の彼らしくて、普段どおりに思えた。少しだけ、気持ちが楽になる。

ス

航海は難渋を極めた。

風にあい、帆が萎れたままである。頼れるのは櫂だけになった。しかも潮目が悪く、逆に流される中を無理矢理力行するしかない。

「帰りが楽だと思おう！」

智の言葉は当を得ていたが、行きが成立しなければ帰りもない。こんな遅々とした歩みではいつまで経つてもイシガキには辿りつけぬ。  
つい、勇が自慢の力を出そうとした。

「……だめだ。勇、ゆっくり」

「……んむ」

善が指示する。いくら漕がねばならぬかわからぬ場合は、いくらでも漕げるように漕がねばならない。

すこしずつすこしずつ、距離を稼ぐ。

太陽が真上に輝く頃、粟を食べた。いつもよりもさらに、美味かった。

考えて見れば早朝、漁に出てから、ろくな休息を取っていない。疲労はピークのはずだった、張った気持ちに權を持つ手を支えていた。

空き腹に、智の大荷物が役に立つ。とっておきの干し米に干した果物、それらが皆のエネルギーとなった。現代でもハンガーノック（血糖値が下がり身体が動かなくなる）は恐ろしい事態である。家中に保存食を蓄えていた食いしん坊の海のお手柄と言ってもよい。

しかし、腹も膨れればまぶたも下りる。人間に取って午後は眠い時間でもある。遂に智が、意識を失うように落ちた。口の立つ者は大抵、体力がない。

四人は文句ひとつ言わず、漕ぎ続けた。なぜならそれは我が身であつたかもしれず、次の瞬間の我が身かもしれないからだ。

そのあたりはもう、優しさとかそういう問題ではなく、まるで五人で一個の生命体のようなものである。

智の予想通り、時化が来た。

波濤が舟を洗う。

真がまなじりを吊り上げて、己が内にある方向感覚に全神経を注ぐ。羅針盤など無いサバニ、波ひとつで大きく進路が変わる。まるで違う方角に向いてしまえば、むしろ目的地から遠ざかることさえある。雨空では、太陽も見えない。

勇がその力を振り絞り、真の指示を的確に舟の動きに変える。善は權を繰りつつ、両足で前後不覚の智を押さえ込んでいる。落ちられたら、困る。

この世に永遠はない。

いかにそのように思われようとも、終わりは来る。時化は去った。木の葉のように波間に舞った丸木舟はしかし、真と勇の奮闘もあって、おおよそ、進路を保った。

次は礼の番だ。

汽船ですらミヤコとイシガキを結ぶ場合、西よりの離島を縫う航路を取る。ではなく、彼らは今、距離を短くするために直線で結ぶコースをひた走っている。

必然、三百六十度、なにもない。

礼は目を皿にして、はるか彼方を見つめ続ける。

「……礼、まだいいよ、この調子だと百海里はまだまだ遠い」  
「……」

善、話しかけないでくれ、とさえ思った。  
ぼくが、誰より早く、陸を見たいんだ。

なんとなく最近つつけんどんというか、自分への接し方が変だな、とは思っていなかったわけではない。

ぽっかりと雲の浮かぶ空に、憐のことを思ってた。  
それがまさか、恋する乙女特有の照れのようなものだったとは……

たしなめるにせよ受け入れるにせよ、とにもかくにもミヤコに戻らねばならぬ。

——まさに真夜中になる。

どれほど漕ぎ続けたのか。半日は既に超えている。  
わずかに風が吹き始めた。帆を張り、櫂を交代にして、少しずつ休もうか、と善が言っ



たその時、

「……イシガキだッ！」

「本当か!？」

「「おい!!」」

礼の叫びに突如跳ね起きた智に、みなで思わず大声を出した。だが今はいい。礼の指す方向を凝視した。

暗い上に、まだ見えない。

「……他の島ではなく？ 本当に？」

「ああ。間違いないよ。地図に載ってる、『おたま』のカタチだ」

わあ……と声にならぬ安堵の溜息が舟を覆った。誰よりも大きく息をついたのがもちろん、気を張り続けた礼だ。

智の代わりに、へしやげるように船底に倒れこんだ。そのまま、気を失った。勇が吠えた。

「よおおおおおし全力じゃああああ!!」

「おう!!」

善と真がそれに応え、智もいそいそと櫂を取った。すぐに黒くうずくまるイシガキが見えた。いままでが嘘のような早さで、島影が大きくなった。

手近な砂浜に、舟を寄せた。

陸にあがるや、長らく櫂を振るい続けた勇と、舵を守り続けた真が、ばつたりと倒れこんだ。

「だつ、だいじょうぶかオイ！」

まるで死人のように微動だにしなかったが、智が耳を当てると、二人とも鼓動はちゃんとあった。

善が、舟から小柄な礼を担ぎ出し、二人の横に並べた。やり遂げた人間ならではの幸せそうな寝顔にも見える。

さて、と善は、ミヤコの島司が持たせてくれた地図を見る。智も覗き込む。おそらくこのおたまの柄の先、北の突端に上陸したということとは……息を呑んだ。

イシガキの電信局は、そのおたまの掬う部分の底にあつた。ここから距離にして二〇里（三〇キロ）はある。海上をぐるりと巡る力と手段は、このとおりもう五人にはない。

「「……ん」」

善と智は、顔を見合せて、うなずきあつた。事は一刻を争う。

おのれの足で、駆けるしか無い。

二人は抱えあうようにして夜道を走った。

智は舌を巻いた。善の足取りが、自分よりも軽快なほどである。

俺はたと寝かせてもらったから元氣もある、が、コイツはどこにそんな力があるのか。体力自慢の勇でさえぶつ倒れたというのに、みなを率いる責任と使命の重圧は一番重いはずなのに……

重いものを背負った方が、力が出るタイプがいる。そういう人間が、リーダーと呼ばれるのだろう。

「……あつ！」

しかしそうは言っても疲労は溜まっている。善が無いことに転んだ。暗く、知らぬ道も災いした。足裏を押さえている。切ったのか、押さえる手から血が滲んだ。

「待ってろ」

智が手早く自分の袖を裂いて包帯替わりにした。そして担いだ荷物から、今思いついた

ように草鞋を取り出した。この当時、島の漁師は婚礼でも無い限りみな裸足だった。

「……すまん。慌てて忘れてた。これを履いてくれ」

「智……ありがとう」

遠慮無く甘えることにした。いま問題は電信局へ辿り着くことである。立ち上がる。もう一度、走りだす。

「どうだ！ だいじょうぶか!？」

「雲の上を歩いてるみたいだよ!」

善は笑った。智が、一番大変な時に寝ていても誰も怒らないのは、その時には彼の役目はもう終わっているからだ。またもしここでこの一足の草履が無ければ、つまり伴走しているのが彼でなければ、数時間は空費しただろう。

ひとには、そのひとの居場所がある。

夜通し駆けに駆けて、集落に辿り着く。探すまでもなく、構えの大きな電信局と赤い看

板が目に入り、その扉を二人してドンドンと殴り、叫んだ。

中から寝ぼけ眼で出てきた局員にあらましを伝え、島司の信書を渡すと、局員は飛び上がり、それから腰を抜かした。

局員に合わせるように、二人も電信局の三和土の上にへたりこんだ。もう、一步も動けなかった。

暗がりの珍客に村人が起きだしてきて、大騒ぎになる。

時に午前四時。まだ、陽も昇っていなかった。

3

玉緒の、そして善の家はさながら、泣き女の集い場になっていた。真の母が一日中手を合わせて神仏に祈り、憐が慣れぬ針仕事を玉緒に教わりながら、気を紛らわせていた。なによりも海が、ずっとわあわあと声を上げて泣いていた。子らは実家に置いてある。おそらく、子らの前では気丈な母の顔をするのだろう。

そうして一日目が暮れ、二日目が暮れ、三日目が暮れた。

玉緒は、泣かなかつた。

百海里に行くには、丸一日は掛かる。古手の航海上手にそう聞いた。となれば行つて一日、休んで一日、帰りに一日、もつとも早くとも丸三日が掛かる。つまり四日目の朝までは、心配することは何も無い。

四日目、朝から玉緒たちは浜に立った。漁師たちは声を掛けず、ただその女房たちが昼や茶を振舞つた。それは漁村では珍しいことではなかつた。帰つてこない舟があつた時に、みなでそうした。

そして七日目が過ぎれば、一度そこで葬式を出す。区切りをつけるためである。

帰つてこない。

四日目はそのまま暮れた。「帰つてきたときに我が島とわからんようになる」と駄々をこねる真の母をなだめすかして、家に帰つた。

五日目も朝から待った。

待ちながら、玉緒は、待たされてばかりだ、と心の中で愚痴を言った。

美丈夫で優しい善は、やたら女達にもてた。なんとかかんとか選んでもらうまでに、ずいぶんと待った。

そういう、サダメなのだろう。

(……もしも帰って来なかったら)

どうする？

自分に問うた。

簡単だ。

待ち続けるしか、ない。

五日目が暮れて、六日目が来た。

六日目も暮れて、七日目が、来た。



その日も夜明けから待った。薄明かりの中、水平線を見つめて待つ。今日帰って来なければ……と、

わんわん！ わん！

チビが突然、駆け回り始めた。水辺をばしやばしやと行ったり来たりする。玉緒の胸は、いっぱいになった。

「海ちゃん」

「……？」

泣きすぎて真っ赤に腫れた海を見た時、はて自分はどんな顔をしていたのだろう。海は怪訝な顔をした。

「隣ちゃん、おかあさん」

「……」

その頃には異変に気づいたみな、水平線を見つめていた。白みゆく西の空に、帆が上がつた。

帰つて、きた。

みなで水面を駆けた。みるみる大きくなる帆は間違いなく、あの見慣れた丸木舟、だつた。

「れいに—————い！」

もう舳先に立つて手を振る礼の姿も見える。

「あな……た……」

愛する善の背中、忘れようもない。その後ろに、もう一回り大きな背中、長い櫂を繰る勇。

あんあん！ あんあんあんあん！

チビはひとしきりその場をくるくる回ると、慌てたようにいずこかへ駆けて行つた。

「……」

真の姿を認めた母は、両手を合わせながら卒倒した。玉緒がそれを支えた。

「……ウチの人が……いない……」

ただ海だけが、真つ青になった。船上には四人だつた。

船が着く。それぞれが奇声を上げ、水しぶきを上げて、家族の元へ走つた。泣きあい、抱きあう。玉緒も初めて、びしょびしょと頬を濡らした。礼はためらう憐を、自分から抱き締めた。待ち続けた母は、息子の腕の中で目を覚まして、また、拝んだ。

「ゼン！　ウチの人は！？　ウチの人は！？」

「……それが」

善は、根っから真面目である。冗談を言う男ではない。が、真面目こそ冗談になることもある。

目を伏せ、舟を振り向いた。そこに、横たわる人影がある。

「……サトーーーーーッ!!」

海が仰向けに寝かされた智に飛びついた。

「サト、サト、サト、目を、目を覚まして！　目を、目を覚ましてええええええええ  
ッ！」

「……んにや」

望みどおり、目を覚ました。

「……は」

「……あー……よう寝た。善、着いた？」

イシガキでは宴会に次ぐ宴会だった。同じ島人である。大切な知らせのために波濤を超えた若者達の勇氣に、ぜひ話を聞かせて欲しいと、なかなか帰してくれなかった。天候も良くなかった。帰りはできるだけ楽をしたかった。そして今になった。

話上手な智は毎日毎晩、宴席の中心にいた。

で、おなじみのようにして、また寝むりこけた。

「馬鹿あああああああ!!」

「あぎゃー……っ！」

船の上馬乗りになって、海は「ウチの人」をひっぱたき続けた。何度も、何度も、何度も、何度も、何度も。

みなのような様子を見て、勇の顔がほころぶ。いいなあ、と思った。嫁のことなど考えたこともなかったが、こうして見るとやはり、居て欲しいかもしれない。

ほんの少しだけ寂しく、イシガキの人々に貰った土産を荷揚げしていると、

わーっ

という歓声が聞こえた。顔をあげた。

子どもたちである。チビが、連れてきた。

あつという間に、鈴成りになる。どの子も泣いていた。おそらく父母から、もう帰つて来ないかもしれないと脅されていたのだろう。

勇は荷をほどこき、飴玉を取り出した。イシガキの村人に貰った。嘘からまことが出た。

子どもたちはそれを、明るくなり始めた陽の光にかざした。きらきらと、美しかった。誰も、食べようとしなかった。それが食べるものだということを、忘れたようだった。

ひとつ、苦笑して、勇も同じようにした。

きらきら、輝いていた。

そこにいたすべての者の頬を伝う、涙と同じぐらいに。

とても残念なことに、彼らはほんの一時間、遅かった。

艦隊の哨戒艦・信濃丸が「敵艦見ユ」の第一報を打ったのが午前三時頃である。

戦は、勝った。

空前おそらくは絶後、と言われるワンサイドゲームで、世界最大最強を誇った露の国の艦隊は、そのほぼ全てを海の底へ叩き沈められてしまった。

きつとちいさな国の艦隊には、善たちのような人々ばかりが乗っていたのだろう。

その報が世界中を駆け巡ると、鼠が象を倒した、と大騒ぎになる。ことに露の国では、無能な皇帝を倒せ、と民衆の不満が爆発した。もう戦争どころの話ではない。大慌てで講和が結ばれ、一応の平和が、来た。

それ以上の血は、流されなくて済んだ。

もし、島の長老たちが、もつと早く善たちに頼み込んでいれば、彼らはもつと大きな榮譽を得られたかもしれない。事実、ミヤコとイシガキの一部の島人しか知らなかったこの話が掘り起こされ、彼らが国じゅうから「五勇士」と持ち上げられるのは、三十年も後のことになる。

海軍から国家から表彰され、教科書にも載った。あまつさえ彼らがサバニを駆る雄々しい像まで立った。

その前で、もう孫まで居る五人は、照れ笑いをした。

話の巧い智は、ほうぼうに呼ばれては酒席で冒険をおもしろおかしく語った。もちろん、自分が寝ていたことも正直に話した。

それを許してくれる友を持て。それが許される自分になれ。

彼らしく偉そうにそして小奇麗にまとめて、拍手と酒を浴びた。

海ばあさんは智じいさんの亡くなったあと、「調子にのつて酒ばかり呑むから」とまた、泣いた。

善はまるでそれがサダメかのように島司になり、近代化に巻き込まれる暮らしと、古くからの島人の慣習との折り合いに苦心した。だが島人は、英雄の言葉をよく聞き、それに



従った。

玉緒の家には、四六時中誰かしらの客がおり、なにかしらの寄り合いがあつた。いつもこうだ、と彼女は笑つた。

彼らの壮挙が後世の我々の胸をも打つのは、ただ、その行動が名誉や金銭を求めてのことではない、ところにある。

ある者は人類に対する優しさ、とでも言うべきものから、またある者は好奇心から、またある者は友のために、とにもかくにも純粹に内なる衝動から、無謀とも思える挑戦を、冷静な頭脳と強固な意思、そして鍛え抜かれた身体と技術によつて、成し遂げた。

その普遍的といつていい成功譚が、ともすればくさくさする日常に、大きな風穴を開けてくれるのだろう。

どんな大きなことも、焦らず、少しずつやれば、いつかできあがる。

善がそう言い、またそうしたように。

大冒険もいいが、今日の飯も大切だ。

遅れた日々を、取り戻さねばならない。

大切な人々に、うまい飯を食ってもらわねばならぬ。

帰島からわずか一日、休んだだけで、また五人は朝早くから、いつものトビウオ漁に出た。

エイ・サー エイ・サ

エイ・サー エイ・サ

掛け声を掛けあつて、男達が漁に出る。

あの、丸木舟に乗つて。

## ■ 本日のメニュー

ありがとうございます。ながたかずひさです。

お楽しみいただけましたでしょうか。

無粋は承知、お料理の能書きをひとつ……

## ■ 「街道へゆこう！秋田編 なまはげ・マイラヴ」

○三年の夏コミに出した「街道へゆこう！」が変に評判が良く、「続きは出ないので、か」と聞かれることもありまして、で。

ずっとちゃんとした紀行を書こうと企んではいたのですが、やっぱり二兎を追うのは難しく、軽いイチヤコメになりました。すみません。

## ■ 「プリキュアになりたくて。」

○九年の年末に高校卒業二〇年の同窓会をやりまして、幹事団の一員として久しぶりに会う同級生とわいわい楽しくやりました。その記憶と共に。

「ハートキャッチプリキュア！」はザッツ・エンターテイメント、とてもおもしろくて、

日曜朝が待ち遠しいです。

■ 「Diplomacy」

半分実話です（笑）僕も小学校から劇をやるといえば脚本書いたり演出をしたりして、結局、こんな仕事しちゃってます。

運命って、わからないようで実は決まってるような気がしてなりません。

■ 「丸木舟速報隊」

戦前の教科書には必ず載っていたと言われる、「久松五勇士」の逸話をおとぎ話風にアレンジしてみました。

人間というものは最後は理屈ではなく、こういう「衝動」で動くような気がしてなりません。そこに善悪や損得は無く……だから心を打つんだと思います。

これだって、対象がバルチック艦隊ではなく村の疫病あたりなら今でも教科書に載ってるはずで、まあ人間の理屈って奴は本当にいい加減です。僕ももうすこし、内なる素直な声に耳を傾けたいと思います。

ご意見ご感想などありましたらご遠慮なくメールください。お待ちしております。

nagata@mti.biglobe.ne.jp

ホームページにもどうぞお越しください。読み物いろいろあります。

<http://rakken.net/>

最後にもう一度、お読みいただきまして誠にありがとうございます。  
またどこかでお会いしましたら、どうぞよろしく。

二〇一〇年大晦日   ながたかずひさ

## ■おくづけ

「丸木舟速報隊」

作者 ながたかずひさ

発行 PowerNetwork!!

初版 2010.12.31

第二版 2011.12.25

mail nagata@mti.biglobe.ne.jp

web <http://rakken.net/>

twitterID KazuhisaNagata